

はじめに

彦坂佳宣

日系文化研究会は、立命館大学言語文化研究所の課題別研究会の一つであり、主として北米の日系移民に関する歴史・文化・社会的な諸面の研究をおこなっている。ほぼ毎月一回の定例研究会をもち、また随時、合宿その他の活動を継続してきた。

1998年度からはプロジェクト研究となり、特にアメリカ本土とカナダにおける日系移民の状況のうち、第二次世界大戦以後の再定住からリドレスの時期までに焦点をあてた研究を課題として活動している。また、これらに直接関連しない研究課題をもつ会員のためには、南北アメリカ大陸とハワイを含む諸分野の研究活動も含む形で例会をもってきている。

会員は歴史・文学・言語・文化人類学その他の研究者にわたり、これら諸分野の研究視点を総合したかたちの研究成果を出すことを計画している。

今回の特集として掲載された諸論考は、第一には会員の個人的努力のたまものであるが、こうした活動を通して生まれてきたものである。以下に、研究会などでの質疑の内容を思い出ししながら、これらの記事・論文の経緯と特色などを少しばかり記しておく。

第一に掲げたカナダの日系作家ジョイ・コガワのインタビュー記事は、1997年11月に本研究会が彼女をまねき、その作品や活動について語ってもらったテープを記事の形に起こしたものである。ジョイ・コガワは、その前日に行われた立命館・UBCセミナーで講演を行った。翌日、多くの会員の参加のもとに比較的反ラックスしたかたちでこのインタビューが行われた。傍らには、権並恒治も同席していた。同氏は、やはり昨日の研究会の講師の一人として招かれたが、UBC Asian Studiesの図書館司書として活躍しておられ、UBC中央図書館所蔵の日系人スペシャル・コレクションの専門家としても知

られている。

われわれは、このインタビューに先立って、9月初旬に洛北大原において2日間の研究合宿をもち、インタビュー記事の冒頭にもあるように彼女の小説の連作をとりあげて報告・議論をおこなっている。

さて、このインタビューでは、まず前日の講演の中核である“the Journy Thus Far”に再び言及し、trust・love・mercyといった言葉を頻繁に使用しながら、彼女が人生の時々感得した心境を語り、それと作品のテーマとの関連を示唆している。話が時に日常の些事に及ぶ点は、彼女の作品の随所にあられる、記憶の断片が活き活きした感覚で描写されている場面を思い浮かべる人もいるであろう。個人史から始まり人間の人生一般にその視点を広げていく彼女の語り口も、耳あざやかであろう。

他にマルティカルチュアリズム、リドレス、ObasanやItsukaなどの登場人物像等々の内容が語られている。これらは、すでに他のインタビューの記事類と重なり合う点もあるようであり、第二論文の和泉氏にも言及するところがあるが、リドレスから10年程が経過し、また彼女自身も*The Rain Ascends*を書き終えてしばらく経た時点での記事として、以前の彼女に関する諸論考との比較・対照の好材料となろう。

なお、このインタビューは、会員の一人である野崎京子氏の司会で行なわれ、文字化も彼女の労に負っている。ジョイ・コガワと何度かの往信もあったと聞く。研究会として野崎氏に深く感謝したい。

第二・三論文は、会のプロジェクト課題に直結したテーマを論じたものである。

このうち、和泉論文は、これまでのカナダ日系移民史研究が戦中から戦後のリドレス運動前後までの間が空白期であるとし、従来目立った活動として認知されている1977年の日系移民百年祭以前の、

1960年代以降の諸動向を考察している。

本論中では、日系三世の学生たちの活動、トロントでの英文出版物による活動、収容所体験記の出版、作家ジョイ・コガワの活動、ケン・アダチを中心とする日系人史の編纂、パウエル街の社会活動などの模様が報告され、今までの日系人像を増補する考察がなされている。従来手薄といわれている時期をとりあげ、大人しいと見られていた二世の、その建設的な役割にも目配りしている。和泉氏は学究の徒として長くカナダに滞在する機会をもっていて、オリジナルな資料による研究は会員にも刺激的な存在となっている。

次の論文は、長年、日系カナダ人移民史を手がけている佐々木氏のものである。戦後の日系移民史のうち、記念すべき百年祭の時期の問題を扱い、その開催の準備過程を契機として日系人組織が再編成されやがてリドレスへと向かう直前までの模様を、多量な会議記録などを活用して詳細に論じている。やはりリドレス以前の日系人史の空白部をうめるものであろう。

百年祭を準備する各地の模様・プログラムや公演の模様などの詳細なことは言うまでもないが、その背後にあって各地日系人組織が次第に形をととのえて緊密化し、参加する人々の意識も自己改革をともなう焦点化がなされ、やがては新しい名前のもとに

全国組織が生まれるまでを論じている。リドレスはこうした動向の中で達成されてきたのであろう。こうした個々の具体的な活動の絡み合いが全国組織の大きなうねりを作り出したことを読むべきであろう。リドレスの提起は、早く1977年7月の会議でゴードン・平林がしていることも述べられている。

第四論文は、自身が日系三世という境遇も理由のひとつとなって日系文学の研究を始めたという野崎氏のものである。

キョウコ・モリのいくつかの作品を、日本での両親、とりわけ母を自殺においやった父との葛藤から生じてくる諸問題（日本の「家」や女性のありかたなど）を分析視野に入れて考察している。

キョウコ・モリはやがて父のもとを去って20歳でアメリカに渡り、日本を捨てたような環境の中で英語で詩と小説を書き始めたという。この点との関連では、彼女にとって小説の言語としての英語と日本語の表現性の相違の問題も検討されて、彼女の日系文学の特異な点の検討にも及んでいる。

以上が今回の特集に収載された記事・論文の概要である。それにしても月一度の研究会は休むことなく持ちながら、もう少し他の会員の成果が世に問えなかったものか、私自身の活動の反省も含めて、残念なことであった。